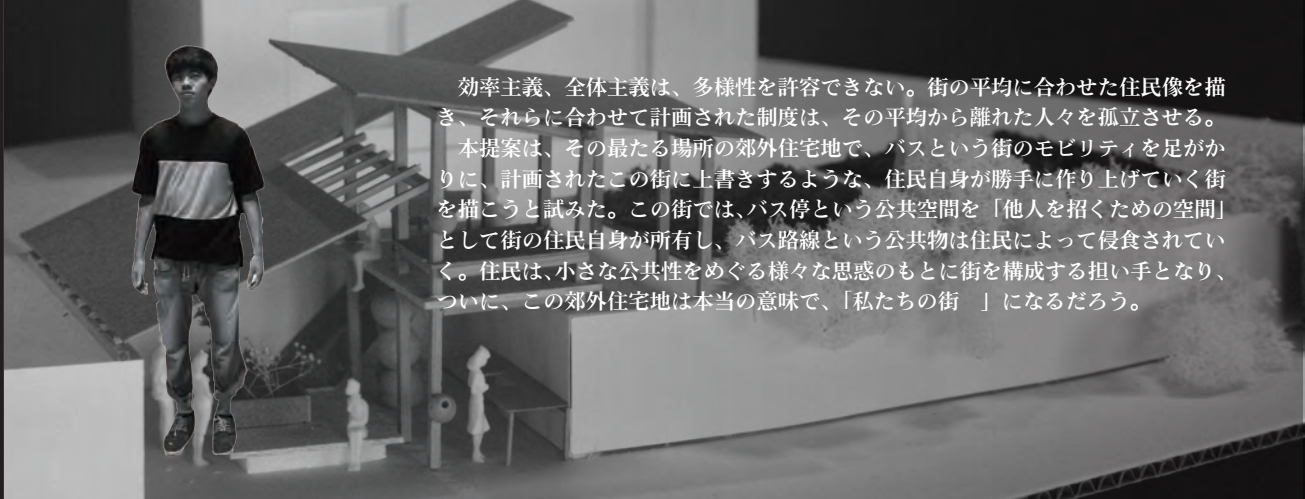




効率主義、全体主義は、多様性を許容できない。街の平均に合わせた住民像を描き、それらに合わせて計画された制度は、その平均から離れた人々を孤立させる。

本提案は、その最たる場所の郊外住宅地で、バスという街のモビリティを足がかりに、計画されたこの街に上書きするような、住民自身が勝手に作り上げていく街を描こうと試みた。この街では、バス停という公共空間を「他人を招くための空間」として街の住民自身が所有し、バス路線という公共物は住民によって侵食されていく。住民は、小さな公共性をめぐる様々な思惑のもとに街を構成する担い手となり、ついに、この郊外住宅地は本当の意味で、「私たちの街」になるだろう。

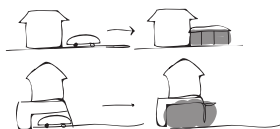


バス亭の家

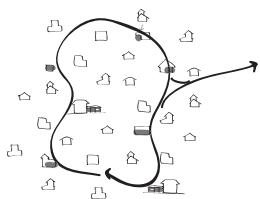
- 住民が担う小さな公共 -



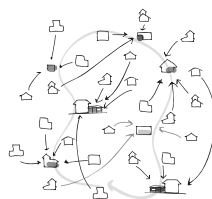
住宅を持つ駐車場を
バスを待つ場所＝バス亭へ



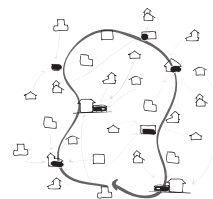
これらを結ぶような路線を計画

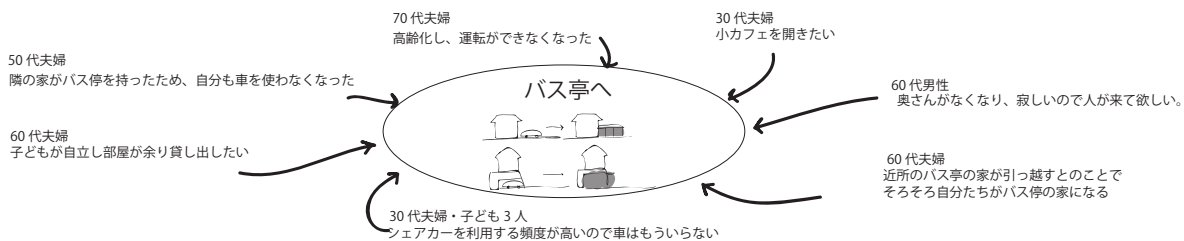


バス亭は「街の住民」が「他の街の住民」を
招く空間となり、一様だったバス停が色付く



バス路線そのものが地域のための空間となり
住人が作り出す郊外住宅地の新たな居場所となる





『美しが丘』郊外住宅地

敷地は、横浜市にある東部田園都市線たまプラーザ駅を最寄り駅とする、郊外住宅地である。都心に働きに出るサラリーマン家族のベッドタウンとして計画されたこの街は、結婚世帯がほとんどを占め、生涯住まう街として存在する。



郊外住宅地のバス停

郊外住宅地のバス停は、ディズニランドのバス停と違う、以下のような特徴を持つ。そのためのバス停は、郊外における特異点となっている。

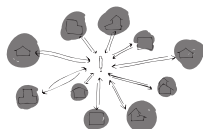
1. バス路線という街の動脈

郊外住宅地の内部に何もなないため、食材をかうのにも日用品をかうのにもバスで住宅街の外に出る。駅までは通算し得ないし、バス路線なしでも存続し得ない街である。バス路線が住宅街を生かしている。



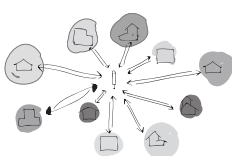
2. バス停の大きすぎない公共性

住宅街のバス停は、利用者のほとんどを住民としたバス停。そのため、外部から人が訪れるディズニランドのようなバス停とは、大きく異なる。



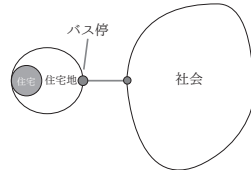
3. 日常が重なる場所

バス停は、誰もが日々の生活の中で通過する場所として住宅街の特異点になっている。



4. 住宅街の玄関

家の中の生活と、社会の中の生活は分断されている。バス停はその一つの境となっており、2つの生活が延長される可能性を持つ。

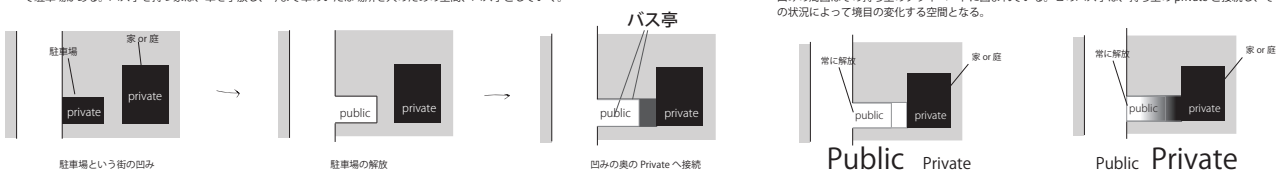


計画1 人のためのバス「亭」

バスの停まるバス「停」ではなく、人の過ごすバス「亭」である

「道の凹み＝駐車場」のバス亭化

柵や擁壁によって道と距離が取られ、道には過す場所のない。しかし、道と必ず接続し、道から凹んだような場所として駐車場がある。バス亭を持つ家は、手放し、今まで車のいたば場所を人のためのバス亭、バス亭としていく。



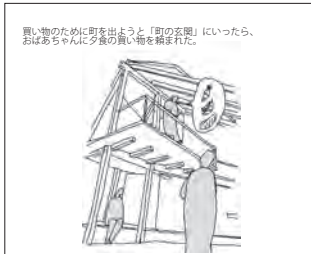
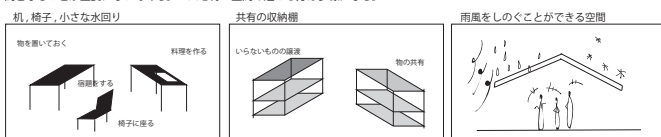
持ち主の個性によって色づくバス亭

バス亭の住人によって private と public が変動することで、訪れた人にバス亭の個性が紹介し、趣味、体験を共有する新たな刺激がもたらされる。バス亭は、街の新たなテーマとなっていく。



火花を大きくするバス亭の空間

バス停は過すところという場所ではなかった。バス亭は、過す場所であり、持ち主によって与えられた火花が燃え広がるような空間となることが重要になってくる。バスを待つ空間の過ごし方は多様になる。

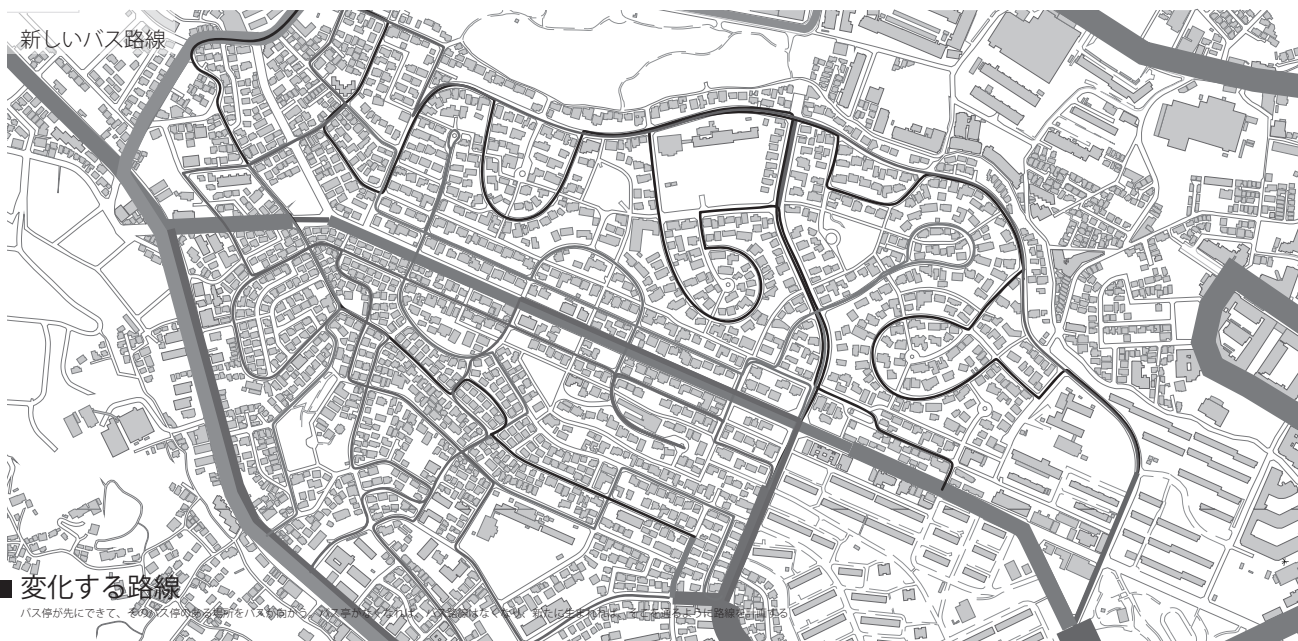


計画2 毛細血管路線

大きな一本に人が集まるのではなく、バスに来て欲しい人のもとをバスが訪れる。

PROJECT

新しいバス路線



■ 変化する路線

バス停が先にできて、そのバス停がある場所をバス路線が訪れる。バス停がなくなれば、その路線はなくなり、新たにバス停があるところにもバス路線が訪れる。

0

家の前にバスが来て欲しい人の家につく空間を作る



1

それらを通るようにバス路線を計画



2

新たに生まれれば、そこにバス路線を引く



3

その家がなくなれば、バス停もなくなる路線もなくなる



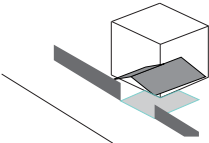
4

街の代謝とともに路線も変わる



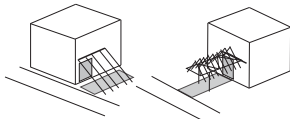
道に開かれた妻入り

道の一部であるバス停は道に対して閉じてはならない。道に対しては口を開き、側面のプライベートルームは、緩やかに開いていく空間として、この形のバス停は妻入りの形態をとる。



住宅にもたれる構造

駐車場で生まれたバス停は、住宅の一部として存在する。これらは、住宅に直接接続する構造をとる。住宅の構造体から梁をかけ、そこを足がかりに住宅を構造体とみなした構造をとることで水平力を住宅に負担してもらおう。



■ バス停と繋がったバス

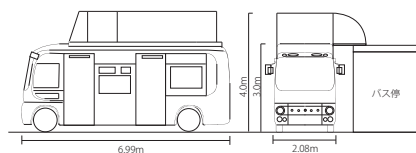
美しが丘のバスはバス亭での過ごしと繋がったバスになる。

2階から乗れる

美しが丘の住宅地は傾斜に立つ住宅が多い。傾斜の上の家は高層になると、家から出るために階段を降りなければならない。そうなることが難しくなる。そこで地上3mの高さでバスに乗れるようにすることで往復を減らし、生活の一部になる。

西側から乗れる

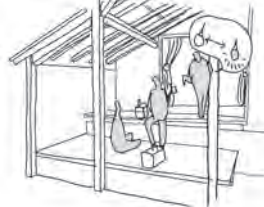
美しが丘のバス亭は、一方通行の道路の上にも多くある。それらの道では、左からだけでなく右側からも乗れる



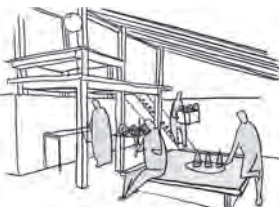
階段を上るおばあちゃんを助ける



家の電気が切れてしまったので学校から帰ってきた学生に取り替えてもらった



仕事から帰って来ると、おばあちゃんたちが町で育てていたイカを切って振舞ってくれた



帰って来て、近所の奥さんとバス停で食材を調理する



板のある家は、春になると人がたくさん集まる



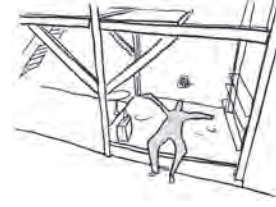
反対方向のバスに乗る近所の奥さんと話が盛り上がりすぎてしまいバスを1本見送った

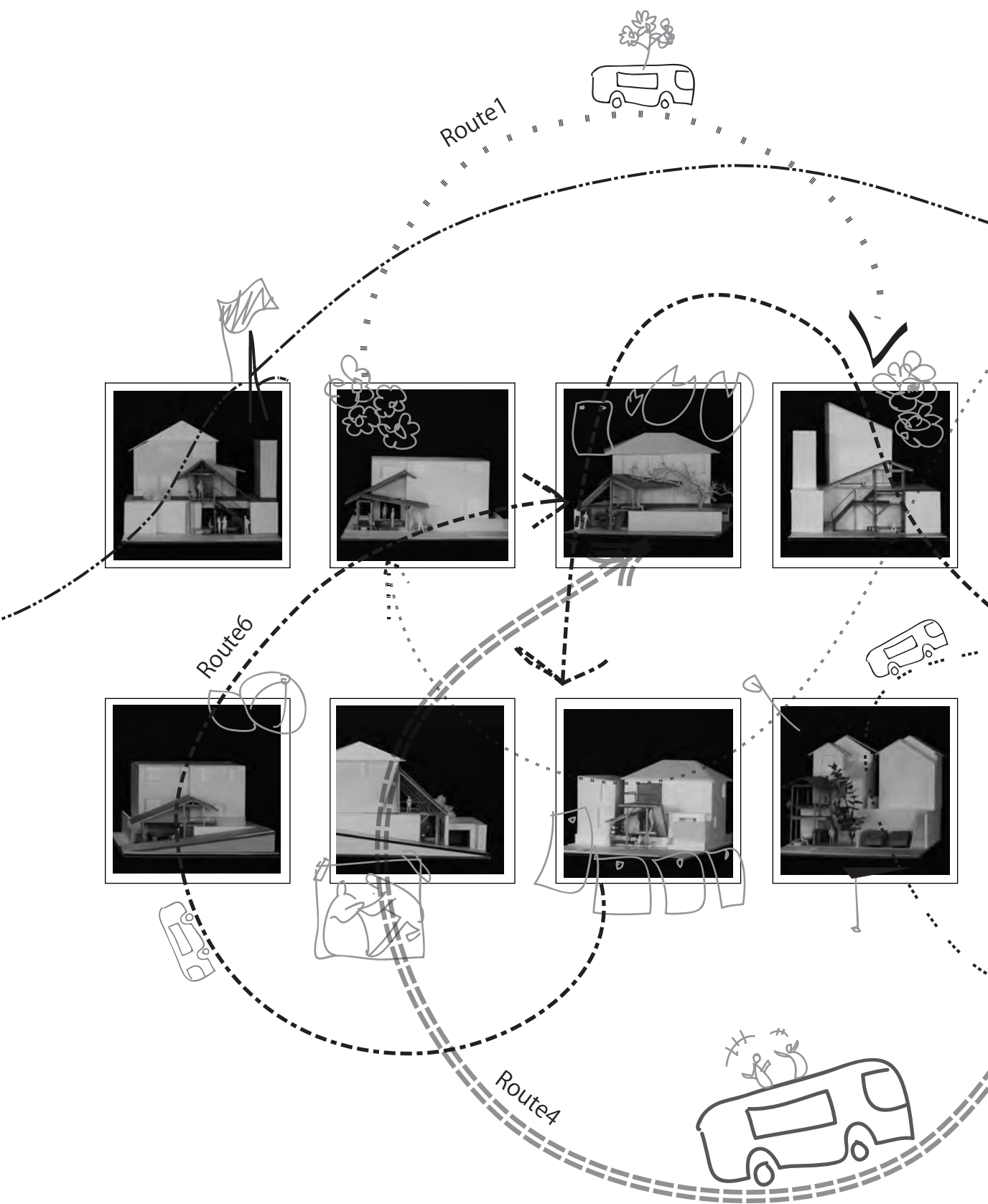


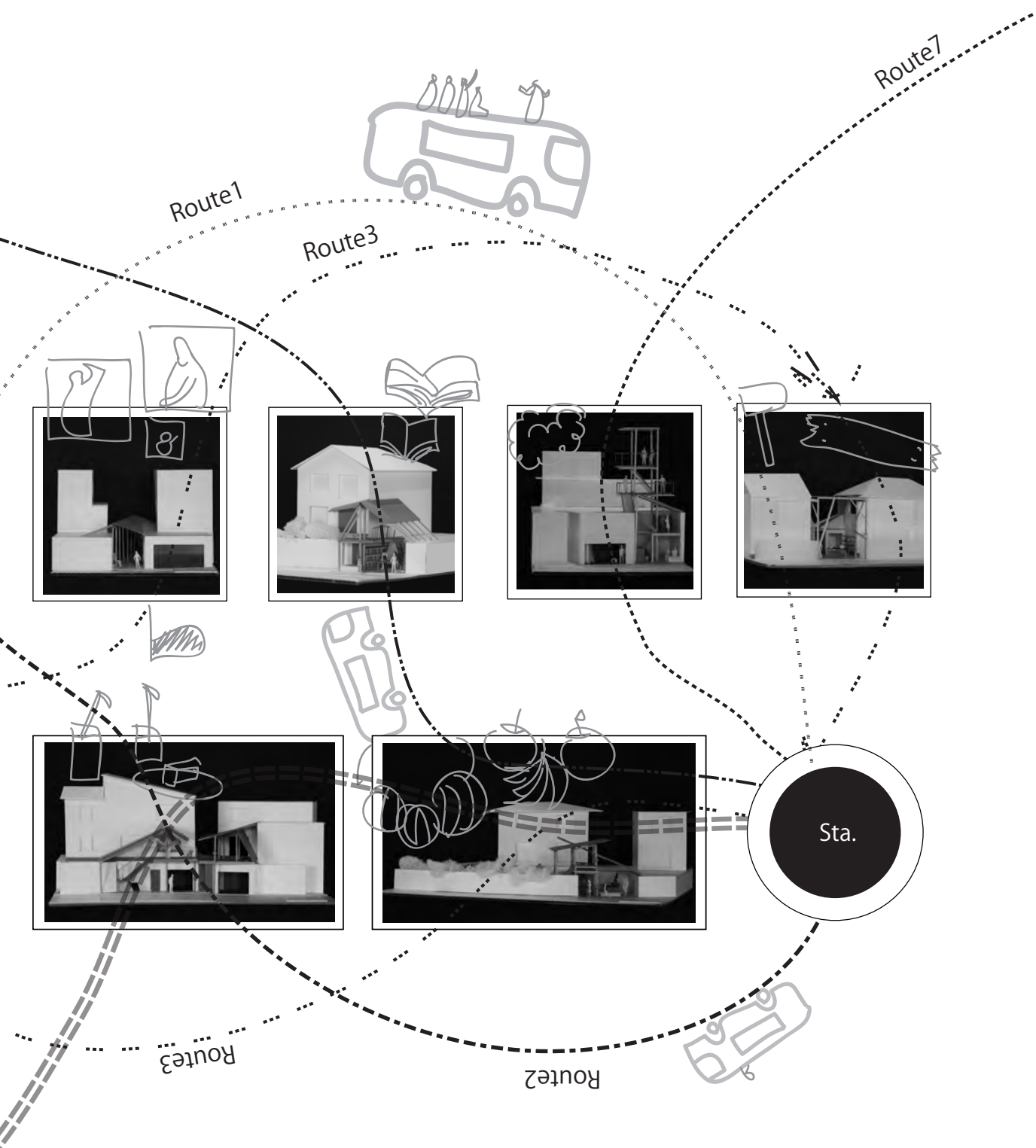
週末になると、あのおばあちゃんにはたくさんの人が集まる。



「あーバス行っちゃったよー」でゴロゴロする。







バス路線そのものが街の新しい空間であり、この街のテーマとなるでしょう。
おもいおもいにバス亭を彩り、自分たちだけのバス路線を育てていくことで、
バスの輪に、新たな共同体が築かれるのです。

おばあちゃんちのバス亭

一人暮らしのおばあちゃん。体が悪く、他のバス停のように特別なことができないわけではない。でも、ある冬の雪の日、毎日に持っているいつもの中学生に、あったかいお茶を出してあげた。その日、電車が切れて困っていたおばあちゃんのために、その学生が切れた電車を交換してくれた。

地上階平面図 1:320

断面図 1:320

立面図 1:320

桜のバス亭

桜の木を持つ家。桜が咲くころになるとバス亭から、この庭に入れるようにしてくれるため、春になるとバスを持つ人で賑わうバス亭。

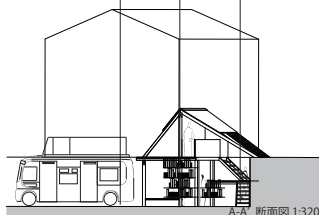
地上階平面図 1:400

増設階平面図 1:400

A-A' 断面図 1:320

本棚のバス亭

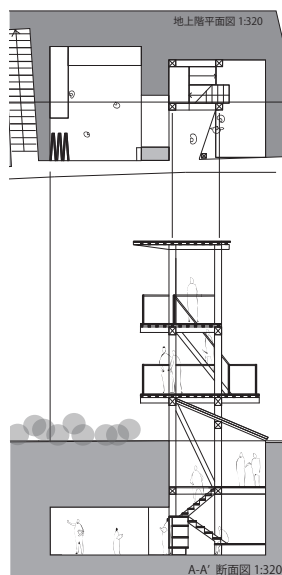
小説が大好きな家主。今まで読んで来た様々な本をバス亭に出し、人々に貸し出している。4つ隣のバス停にも本棚があり、街のいらなくなった本を集める路線になってきた。



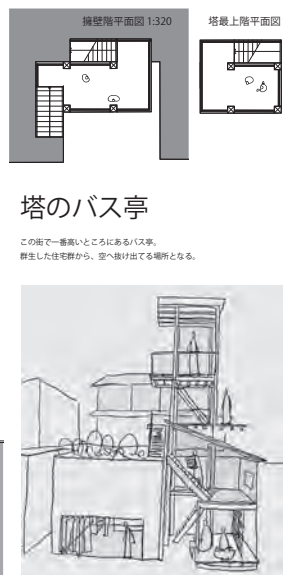
A-A' 断面図 1:320

塔のバス亭

この街で一番高いところにあるバス亭。群生した住宅群から、空へ抜け出せる場所となる。

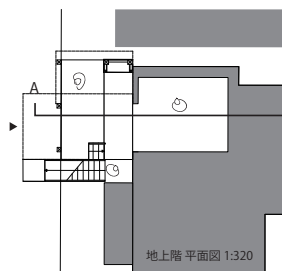


A-A' 断面図 1:320



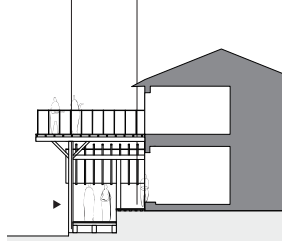
空き部屋貸し出しのバス亭

子どもが自立し、開いた部屋を貸し出すことにした。借りてもらいやすいように、家をバス亭にし、2階の空き部屋を窗外から入れるようにした。芸術大学の大学生が、部屋を借り、自分の作品をバス亭に展示するようになった。



地上階平面図 1:320

2階平面図 1:320



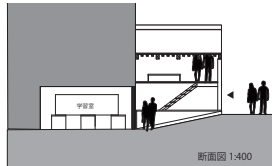
スイカのバス亭

大きな庭のあった住宅。廃断になり、この庭の手入れはできなくなってしまった。そこで、ここをシェア畑として貸し出し、地域の人に開放する。できた野菜はバス亭に並べられ、近所の奥さんが、よくその野菜を買っている。夏になると、家主のおばあちゃんがシェアばただけでできたスイカ切って置いておくため、夏は子どもが多いバス亭となる。

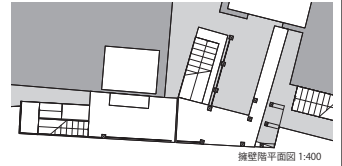
シェア畑

A-A' 断面図 1:320

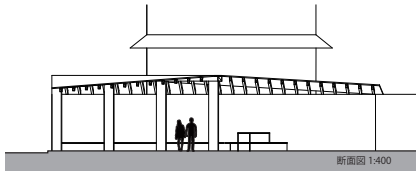
くもんのバス亭



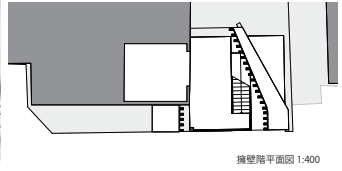
自家製スムージーのバス亭



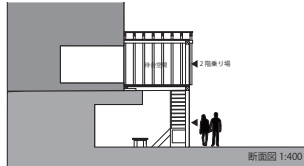
ギャラリーのバス亭



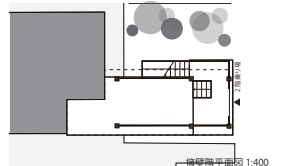
プロレス大好きバス亭



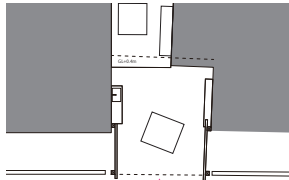
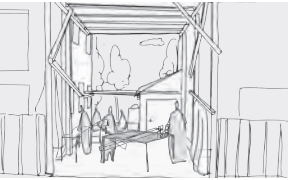
ミニシアターのバス亭



庭いじりのバス亭



日曜大工のバス亭



共有キッチンバス亭

